



地域に笑顔と話し声を

「場をつくる」学生の挑戦

ひとりの学生の発案から市民の対話・傾聴の場が生まれている。

現在、東京都内の大学に通う松村悠生さんは、高校2年生の時に柏市教育福祉会館（通称：ラコルタ柏）の事業推進委員会に参加するように、地域の課題解決を行う仕組みづくりを考え始めた。

松村さんは、小学生の頃からボランティア活動に参加し、高齢者

（写）松村悠生さん



を中心に地域の人たちとの交流を深めてきた。

「高齢者の方々とお話しすると皆さん元気になってくれるんです。」

その体験を元に、地域付き合いや社会的なつながりが減ることで生じる孤独・孤立の課題解決に向けて、気軽に人と人が話を出来るイベント『まちのトークルーム』を企画。令和6年度からラコルタ柏3階にあるフリースペースにて、年3回実施することとした。

開放感のあるスペースに置かれた机と椅子。そこにいるのは、松村さん他数名のトークの相手役である。そこに、話をしたい人がふらっと現れる。中には、悩み事を抱えた人もいるようだ。

まちのトークルーム開催

令和7年8月28日（木）午後2時から4時まで、ラコルタ柏3階オープンスペース（柏駅東口から徒歩10分。柏市役所の隣にあるレング調の建物。柏市柏5丁目10）にて、「まちのトークルーム in ラコルタ柏」を開催予定。時間内、どなたでも出入り自由。

「来てみたら意外と面白かった」との感想が、これまでの参加者から届いている。百聞は一見に如かず、ぜひお立ち寄りください。尚、11月にも開催を検討中。

問い合わせ（柏市社会福祉協議会）
☎ 04-7163-9001



「アドバイスはしません。聴くことに徹します。問題解決ではなくて、気持ちを吐き出して楽になってもらいたいんです。そして、笑顔で帰ってもらいたい。」

いずれは、ラコルタ柏だけでなく、市内のあらゆる所へトークルームの場を広げていきたいと考えているそうだ。

「ひとりで悩む状況を解消できれば、自殺予防にもつながると思います。」

原点は「防災」への関心

松村さんの活動の原点は、幼少期における東日本大震災の被災体験に始まる。防災に強い関心を持つようになり、中学1年生で防災士の資格を取得した。

「多くの死者が出た2018年の西日本豪雨の際、日頃から積極的に「ミニケーシヨン」を図っていた地域は、逃げ遅れる人が出なかったんです。」

コミュニケーションは、防災にも大きな効果をもたらす。まちのトークルームの取り組みが地域に広がることで、いざという時に助け合える関係づくりにもつながると、松村さんは力強く語った。

ゲートキーパーの役割

「まちのトークルーム」における話を聴くかわりには、ゲートキーパーの役割にも通じる。話を聴く中で相手の悩みや異変に気づくこともあるだろう。市としても、地域にゲートキーパーを普及すると共に、対話・傾聴の場が広がることを推進していきたいと考えている。

※ゲートキーパーとは、悩みを抱えた人に「気づく」「声をかける」「話を聴く」「相談窓口につなぐ」「見守る」といった役割を果たす存在。資格や職業ではなく、誰もが担うことができる役割であり、自殺予防に効果的とされ、国でも普及が進められている。